

「幼児教育学科生と付属幼稚園児との共同製作の有効性」

共同制作活動の授業の分析から

戸濤幸夫(県立新潟女子短期大学)

1 テーマ設定理由と研究の目的

県立新潟女子短期大学幼児教育学科では、付属幼稚園で行う学内実習と新潟市近郊の協力園で行う学外実習がある。その実習打ち合わせで協力園の意見には、実習をする段階で現場での活動を想定し学生にもう少し実践力を身につけさせて欲しいという声があった。

そのため、造形表現関連の科目では実際に付属幼稚園で科目担当者である私が付属幼稚園の園児と活動している場面を学生に示すことが、教材開発の仕方・活動のための準備・導入段階の園児への言葉かけ、一人一人の個性を引き出す支援のあり方、展開方法を具体的に理解させることができると考えた。そこで、付属幼稚園児が造形表現活動を通して今まで以上に創造性が伸長でき、活動をより楽しくするため学生の力を最大限に利用することを考えた。そのような条件を満たすため学生と幼稚園児とのコラボレーションによる共同製作をすることとした。3歳児、4歳児、5歳児対象の3つの活動を行い、園児が学生と共同製作することにより創造力育成にどのような影響が表れるのか、また学生は活動を通して園児の表現からどのようなことを気付くことができるかを検証することにより今後のよりよい授業の向上に役立てたい。

2 研究の方法と内容(実践事例)

活動のための題材の基本的考え方として、活動を楽しむため造形活動の過程や創作物を利用してクイズやゲーム、遊びに発展できる内容のものとする。二つ目は、園児が学生の造形表現からイメージが拡充され個性が発揮できるものとする。三つ目として、園児と学生のコラボレーションということで多くの人数で創作することを考慮し、完成作品が大きく凄いものができたという自己有能感が育まれる内容のものとする。

また、園児が活動している時、造形表現の方法について相談されたら学生がアドバイスすることは良いが、具体的に手伝うような行為はしないことを約束した。指示もできるだけ避け、園児の主体的活動となるように見守ることを学生に伝えた。

① 実践事例1

題材名 「〇〇を探そう！」

対象 付属幼稚園の5歳児と幼児教育学科2年生「絵画制作」受講生による活動

題材のねらい

5歳児になると次第に前図式化表現が見られるようになり、パターン化した人物表現が多くなってくる。動物園で見ている人の様子や自分の体験を通してその時の場面や思いをめぐらし自分や家族・友達を想像させ描かせることは創造力を育むことと思われる。また、みんなで協働して描いた作品で人物探しすることは興味が増し楽しい活動になると考える。

活動の流れ

写真1

(1)

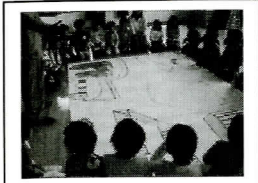


写真1のように、あらかじめブロンズ新社発行五味太郎氏の「らくがき絵本」の「どうぶつをかこう」の絵を、画用紙全紙8枚をつないだ紙に学生が描いておく。

写真2

(2)



写真2のように、それぞれの檻の中にどんな動物が入ると良いか園児にたずねながらあらかじめ学生が作成した動物を貼っていく。

写真3

(3)



写真3のように、園児と学生でにぎやかな動物園にするために見物人を画用紙にクレヨンで描き、まわりをハサミで切って貼ろうと活動を促す。

写真4

(4)

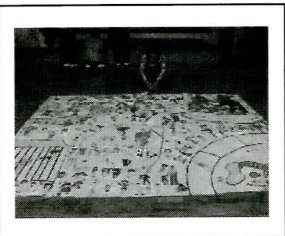


写真4のように、動物と見物客でにぎやかな動物園が完成したところで、ウォーリーを探せのように〇〇探しゲームで遊ぶ活動をする。探すキャラクターは、園児が気付かない内に貼り付けておく。

② 実践事例2

題材名 「いのくまさんにまけないよ！」

みんなでえがいた顔が、大きな1枚の絵になった！

対象 付属幼稚園の4歳児と幼児教育学科2年生「絵画制作」受講生による活動

題材のねらい

4歳児になると次第に自分の描きたいものを線でぐいぐい描けるようになる。人物の特徴を線でとらえて描くような活動について、この時期多く体験させることが大切である。また、できた一人一人の作品を繋げることで構成美の要素が加わり、作品の迫力と共に良さが際立つようになる。みんなで大きな作品を作り上げた感動と達成感が生まれると思われる。

図1

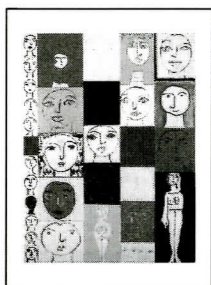


図1の猪熊弦一郎氏の作品のように、個々で描いた作品をつなぎ合わせて大作を作る。

活動の流れ

1. 写真1のように、あらかじめ学生が太筆で墨汁による線描喜怒哀楽を表現した顔の絵を園児に示し、鼻や目、顔の輪郭が表情によりどんな変化があるか気付かせる。
2. 写真2のように、互いに顔の表情をつくり、顔を見合って描きたい表情を決定する。
3. あらかじめ図1のように、紙を合わせると1枚の大きな作品になるように、いろんな色の紙を大小、縦長などの変化をつけて準備する。園児は好きな紙と好きな色の絵の具を選択し、写真3のように表情のある顔や全身を線だけで大胆に描く。
4. 完成した作品を、あらかじめ裏に記入しておいた番号順に並べ1枚の絵になるように貼り繋いで共同製作を完成させる。

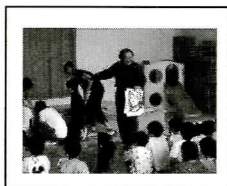


写真1



写真2



写真3



写真4

③ 実践事例3

題材名 「つめてつめて、ならべてならべて、めいろであそぼう！」

対象 付属幼稚園の3歳児と幼児教育学科2年生

題材のねらい

日頃、捨てたり焼いたりするシュレッダーの紙くずや落ち葉を透明な袋にいっぱい詰めることにより詰める楽しさと材料の手触りや色の違いなどのおもしろみに感覚的に気付くことができる。また、袋詰めされた一つ一つが繋がって、大きな迷路が完成することにより新しい発見と感動が生じると思われる。完成した迷路に思いっきり遊ばせることにより、みんなで作り上げた喜びが重なり楽しい活動になると考える。

活動の流れ

写真5

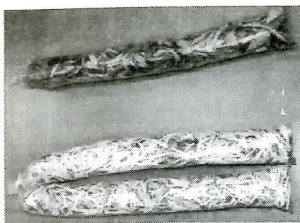


写真6



写真7

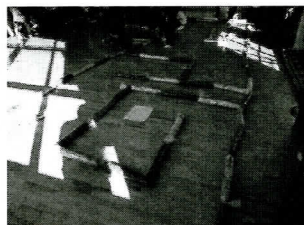


写真8



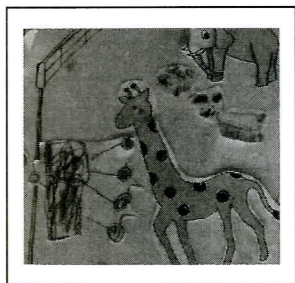
1. 写真5・6のように傘を入れるポリ袋を膨らませて、その中に枯れ葉やシュレッダーにかけた紙くずを袋一杯に詰めてしぼる。
2. 写真7のように迷路となるようにできた袋をビニールテープで繋ぎながらどんどん長く複雑な迷路をつくる。
3. 完成した迷路をじっくり観察し、感想を述べあう。
4. 迷路遊びの仕方を説明し、写真8のように自由に遊ばせる。

3 考察

三つの実践事例より、子ども達が創作した作品や活動の様子、学生の授業記録カードを分析し学生と園児とのコラボレーションの有効性を考察した。

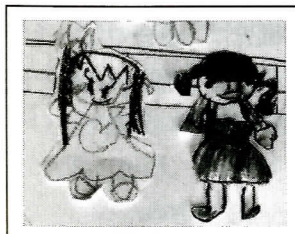
①実践事例1の分析

図2



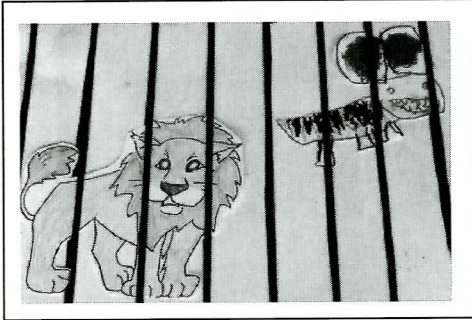
- ・ 図2は、学生が描いたキリンを見て、大きなリングの木を園児が描き加えた部分です。これは、キリンを見て食べ物がなければかわいそうだと園児なりに考え、創造力を働かせて描いたことが伺える。5歳児なりに動物愛護の心が芽生えていることも感じられる部分である。

図3



- ・ 図3の右の人物は、園児なりに家族で動物園に行った時おしゃれして出かけたことを思い出し、ワンピースの服の色を工夫したこと人物に添って丁寧にハサミで切れたことを話していた。学生の活動している隣で刺激を受けながら創造性を働かせていることが伺える。

図4



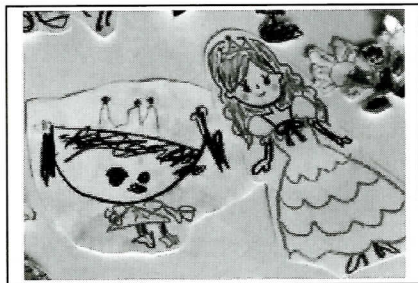
- ・ 図4の学生が描いたライオンを見た園児が、強そうな動物を自分なりに想像し、歯をむき出し怒りの表情の虎を描き檻の中に貼り付けた。危険な動物なので普通の檻ではなく、鉄格子のある檻に入れたことも子どもなりの状況判断がそこに働いていることが伺える。

図5



- ・ 図5の岩と岩の間の橋にぶら下がっている学生が描いた猿を見て、同じように猿を描きたい衝動にかられ描いた園児の猿が前の部分にあります。真似ながら自分なりに猿の毛並みや笑った表情がかわいく表現されています。あんな風に描きたいという憧れから主体的に表現方法を獲得している様子が伺えます。

図6



- ・ 図6の学生が描いた女性像を見て、ヒントを得て描いた左側の園児の人物像は、王冠のような髪飾りを同じように描きながら、左右に髪をしばっている丸い玉のついた髪飾りを加えて表現しています。描いていた園児自身のその日に身につけていた髪飾りです。想像する時に自分を意識した自己表現となっています。

図7



- ・ 図7の園児が描いたカンガルーは、たいへんかわいらしい表情をした愛嬌のある絵である。この園児は、自分の思い通りに表現でき自己有能感を感じた感想を述べていた。

②実践事例2の分析

写真 8



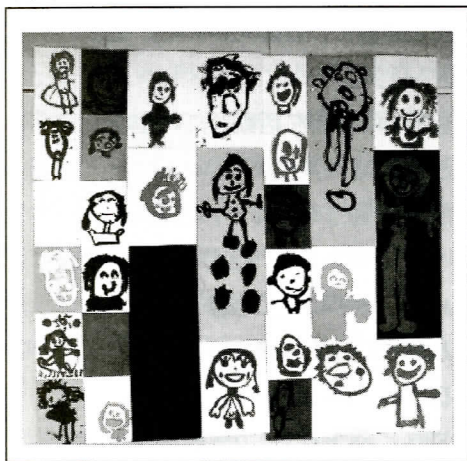
- ・ 写真8のように、年中になったばかりの4月の園児はいわゆる頭足人と言われる表現方法をようやく抜けた時期である。学生が描いた顔の絵や全身像と友だちの顔の表情を思い出しながら画面全体のバランスを考えて制作している様子が伺える。また、園児自身が主体的に自分の思いを表現している。

写真 9



- ・ 写真9の手前の絵は、左手を挙げて微笑んで話かけてくるような表情をしています。右上の園児は、紙が動かないように左手で押さえながら画面全体の構図を考慮し、自分のイメージに近づけながら慎重に描いています。表現者としての自立の芽生えを感じさる。

写真 10

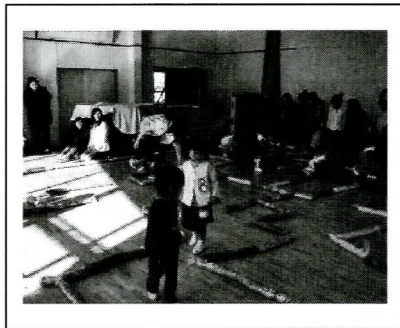


- ・ 写真10は、園児が描いた個々の作品を学生が1枚に繋げて大きな共同作品として完成したものである。

園児一人一人の個性が繋げることでより明確に際立ち、生き生きとした楽しい共同作品となった。完成した作品を前にして、園児はあれがぼくのだとかすごいと驚きの声を上げて達成感を味わっている様子が伺えた。

この活動では、学生が参考作品を描いたり、いろんな紙が合わせて1枚の作品となるように紙を切るなどの準備や園児が自由に色を選択できるように絵の具の準備等サポート的に活動したが、自分たちの描いた作品が園児のイメージを拡充するのにどのように影響を与えるのかが理解できたと授業レポートに記述されていた。

③実践事例3の分析



学生の授業記録カードの記述内容

1.この題材で気付いたこと

- ・普段は捨ててしまうシュレッダーの紙くずや枯葉を材料として遊びの道具にすることは、子ども達の新たな発見につながると感じた。また、一人一人が袋詰めした傘入れ袋を繋げることで巨大迷路が完成していく過程は、友だちと協力して作ったという協働の喜びや達成感を味わえる題材だと思った。
- ・幼い子どもでも作ることができ、自分たちで迷路の形を変えながら楽しむことができ、落ち葉に触れることで、季節を肌で感じるができる良い題材と感じた。また、袋に詰める材料を変えたり、袋にローラーなどで色を付けるなど発展させるこ

とも可能な題材である。

- ・葉っぱやシュレッダーのいろんな色の紙くずを手で掴んで袋詰めする活動では、触覚の違いがめずらしいのか楽しんで活動していた。一つの袋に色違いの紙くずや落ち葉を段々につめてグラデーションのような模様を工夫し詰めている園児がいた。発想力を培うのにふさわしい題材と感じた。
- ・子ども達の袋詰め作業の姿を見て、色々な素材を楽しみながら活動している姿があったので、子ども達の感性を育むのに大切な活動だと感じた。

など

2.園児の活動の様子から気付いたこと

- ・「この葉っぱパリパリしてるね」「まあつかだなぁ！」とさわった感想や見た感想など五感が刺激されている様子や季節の歌を歌う子など季節や自然を感じることで素材を提供することで、遊びながら季節を感じていることが理解できた。
- ・活動が終了した後、迷路に使った袋を集めてベッドのように仰向けで感触を楽しんだり、うつぶせになって楽しんだり身体全体で素材を体感している様子を見て、この活動の楽しさがより見て取ることができた。
- ・迷路が完成したら「僕がつめた袋はこれだよ！」と自分のものにこだわりをもてていることがすばらしいと感じた。
- ・迷路の中で迷いながらも自分で考えて、新しい道を見つけていこうとする姿があり、遊びながらも思考力を身につけていくことが理解できた。

- ・袋に詰めること自体遊びになっていたので袋詰めが終わった後「またやりたい」「もう一つ作る！」などと言う園児がいた。自分で遊ぶ道具を作ることに満足していた。個々のものが繋がり迷路になっていくことを楽しんでいる姿もあった。完成した迷路にいろいろな遊び方を工夫して楽しんでいる様子が伺えた。とても有意義な活動であると思った。
- ・散らかることを気にせず、大胆に掴んで袋に詰めていくことで、どんどんたまっていくことを楽しんでいるように思いました。少し袋を開けておくことが難しいようだが、それでも自分でやろうとしている姿を見守ったり、支えていくことが必要だなあと感じた。また、実際に遊ぶ活動では、はじめ複数から少しずつ人数を減らしながら迷路に挑戦することで、すらすら行くことができた園児が迷って悩みながら進んだり、ゴールしようと頑張っている姿があり、楽しみながらもあきらめないことを学ぶよい機会となっていたように思えた。途中でコースに変化をつけることで楽しさを持続させたり、チャレンジする人の人数を変化させるなど遊び方の展開という意味でも学ぶことが多かった。

など

以上の学生が記述した授業記録カードからも付属幼稚園の園児と学生が共同作業することで、園児が学生の活動に刺激されたり支えられたりしながら園児の主体性や創造力育成に大きな働きがあることが伺える。また、学生にとって園児がどのように五感を働かせ創造力を育んでいくのか、造形活動を楽しく主体的に行わせるにはどのような配慮が必要なのかなど学べたことが伺える。

4 まとめ

以上の三つの実践事例における考察から、共同製作、共同活動することは園児にとって主体性や創造性を育むのに有効に働くことは当然のことのように確認された。人が何かの行動する時に先人の成功を真似ることから始めることが多いと思われる。親や先生の背中を見て育つと言われるように、芸術家が発想したり創造する場合、過去の巨匠や恩師、同時代の作家や仲間などの作品の影響を受けることも同じである。園児にとって造形経験の豊富な学生の表現はあこがれの的である。その表現方法を真似ながら自分なりの表現を模索をすることで今までできなかった表現方法を身につけたり、創造力を伸張することができる。

学生にとっては、共同作業することにより子どもの創造力や表現技術がどのように身に付くのか、活動が停滞する原因はどんなところにあるのか、子どもの造形表現の自立はどのように発達していくのかなどが特に実感できる活動であると言える。今後さらに学生が現場で役立つ教材開発のためにも、共同製作・共同活動を大切にしていきたい。